

美術文化に対する見方や感じ方を深める鑑賞の活動

～表現の活動との関連と「対話」による授業構成の工夫～

那覇市立神原中学校教諭 照屋 真紀子

〈研究の概要〉

中学校学習指導要領解説美術編では、中央教育審議会答申の中学校美術科等の成果と課題を受け、改訂の具体的な方向性として「生活を美しく豊かにする造形的な美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実」が示されている。そこで本研究では、美術文化に対する見方や感じ方を深めるために、表現の活動との関連と「対話」による授業構成の工夫を行い、実践を通して検証した。

その結果、仏像を「みる」場において、造形的な視点をもたせるワークシートの活用やグループで仏像の再現活動をさせることで、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師の心情を実感的に捉えることができた。また、授業の一連の流れにおいて、仏像の存在価値をグループで話し合わせ、考えを共有させることで、新たな気づきや発見を生み、仏像や身近にある美術文化についてについて自分としての価値をつくるだすことができた。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	71
II	研究目標	71
III	研究の仮説	72
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	72
V	研究内容	72
1	「美術文化に対する見方や感じ方を深める」について	
(1)	美術文化について	
(2)	「見方や感じ方を深める」について	
①	造形的な見方・考え方	
②	造形的な視点	
2	表現の活動との関連について	
3	「対話」による授業構成について	
(1)	「対話」について	
(2)	「授業構成」について	
(3)	「対話」と「授業構成」の工夫	
VI	授業実践（第2学年）	75
1	題材名 「刻まれた祈り」	
2	題材目標	
3	指導計画（全3回）	
4	本時の目標	
5	授業仮説	
6	本時の展開（3／3）	
VII	結果と考察	76
1	作業仮説(1)の検証	
	【結果】【考察】	
2	作業仮説(2)の検証	
	【結果】【考察】	
VIII	成果と課題	80
1	成果	
2	課題	

〈主な引用文献と資料〉

美術文化に対する見方や感じ方を深める鑑賞の活動

～表現の活動との関連やと「対話」による授業構成の工夫～

那覇市立神原中学校教諭 照屋 真紀子

I テーマ設定の理由

中学校学習指導要領解説美術編（平成 29 年）では、改訂の具体的な方向性として「生活を美しく豊かにする造形的な美術の働き，美術文化についての理解を深める学習の充実」が示されている。また，中央教育審議会答申では「グローバル化する社会の中で，子供たちには，芸術を学ぶことを通じて感性等を育み，日本文化を理解して継承したり，異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようになることが求められている。このため，美術や工芸の伝統や文化を尊重し，実感的な理解を深めていくことが重要である。」と提唱している。

変化の激しい現代社会の中で，一人一人が感性を豊かにし，人生や社会の在り方を創造的に考えることができるよう，豊かな心や人間性を育てていくことが必要である。そのために，自然の中や文化芸術などに触れる豊かな体験をし，感性を高める機会が求められている。特に沖縄県では日本の美術文化に触れる機会が少ない。本研究での事前アンケートでは，鑑賞の活動は表現の活動に比べ，生徒の関心が 14 ポイント低い結果となった。鑑賞の活動は，慣れ親しみが無いものへの抵抗感や何を求められているのかわからず，「意味がわからない」「興味がない」など，関心の高い生徒と低い生徒の差があった。また，「美術文化に関心がある」の項目については，肯定的な回答は 49%であった。

これまでの鑑賞の活動の実践では，造形的な視点をもたせ，自分の見方や感じ方を大切にしながら，それぞれのよさや美しさを味わわせる取り組みをしてきた。しかし，生徒が主体的に自分との関わりの中で美術や美術文化を捉え，生活や社会において美術が重要な役割を果たしていることを実感できるような学習には至っていない。鑑賞の活動を通して，生徒が学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解することは生涯にわたり学び続けることができるようになるために重要である。

そこで，本研究では表現の活動との関連と「対話」による授業構成の工夫を通して，美術文化に対する見方や感じ方を深める鑑賞の活動をめざす。表現の活動との関連と「対話」による授業構成の工夫を研究し実践することで，生徒は伝統や文化のよさや美しさを感じ取り，愛情を深めるとともに，美術文化の継承と創造について実感的な理解を深めることができるだろうと考えた。そして，生涯にわたり美術を愛好する心情を育むことにもつながると考え，本テーマを設定した。

II 研究目標

美術文化に対する見方や感じ方を深めるために，表現の活動との関連と「対話」による授業構成の工夫を実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

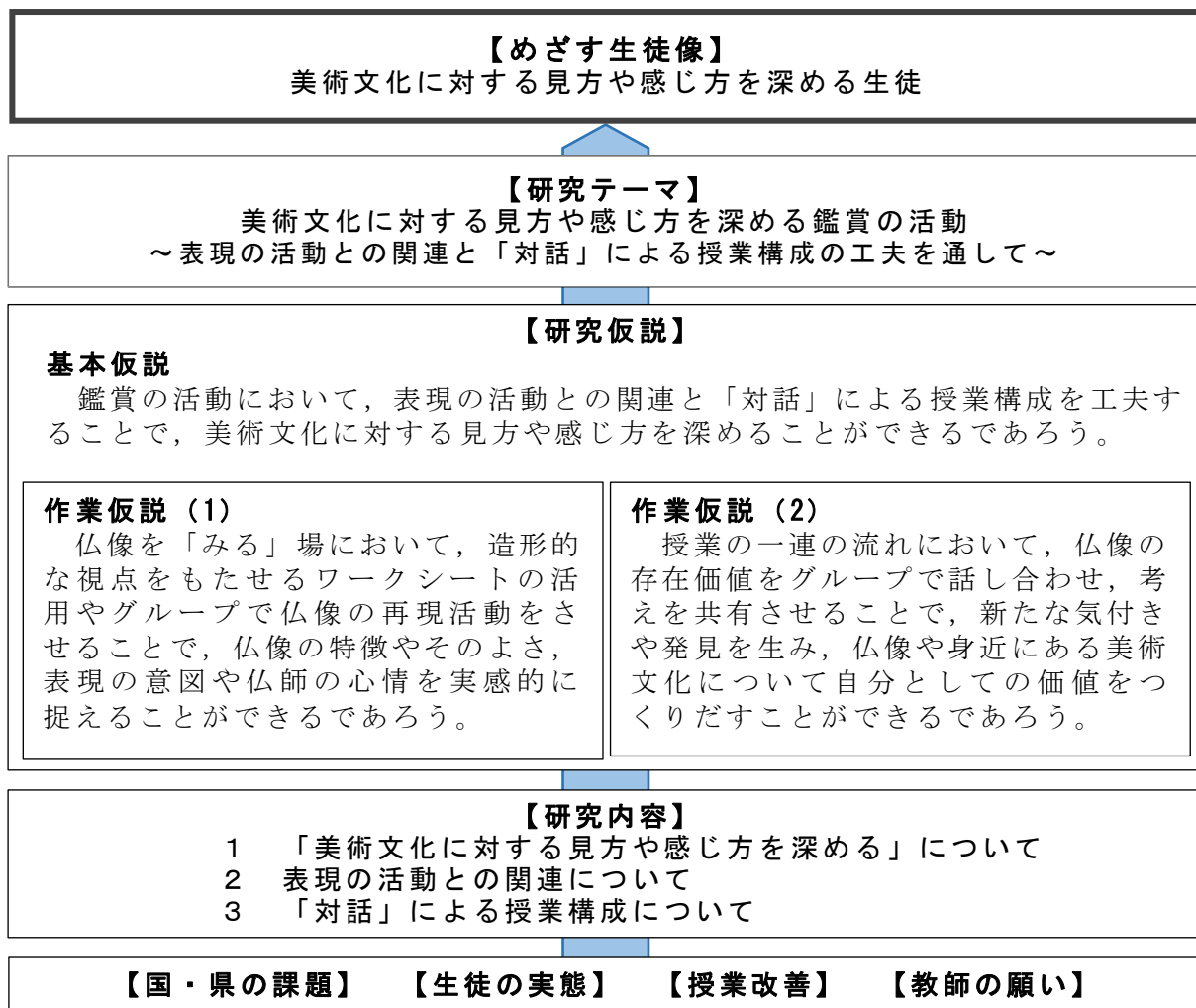
1 基本仮説

鑑賞の活動において、表現の活動との関連と「対話」による授業構成を工夫することで、美術文化に対する見方や感じ方を深めることができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 仏像を「みる」場において、造形的な視点をもたせるワークシートの活用やグループで仏像の再現活動をさせることで、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師の心情を実感的に捉えることができるであろう。
- (2) 授業の一連の流れにおいて、仏像の存在価値をグループで話し合わせ、考えを共有させることで、新たな気づきや発見を生み、仏像や身近にある美術文化について自分としての価値をつくりだすことができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 「美術文化に対する見方や感じ方を深める」について

(1) 「美術文化」について

中学校学習指導要領解説美術編（平成 29 年）（以下「美術編」）には、「美術文化に

については、材料・技術・方法・様式などによって美を追求・表現しようとする美術の活動や所産など、人間の精神や手の働きによってつくりだされた有形・無形の成果の総体として幅広くとらえることが大切」と記されている。

藤田(2018)は「題材設定においては、日本の美術作品を取り上げることで諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付いたり、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えたりする視点を抱合したい。」と述べている。

本研究では美術文化を美術表現の総体と捉え、そのよさや継承と創造について考えさせる。日本の美術文化の題材を「仏像」に設定し、その造形的なよさや美しさ、また先人の込めた思いを自分の見方や感じ方で捉えさせる。日本の美術文化の理解を深めることが、国際化が進む社会において大切だと考える。

(2) 「見方や感じ方を深める」について

美術編では「見方や感じ方を深めるとは、鑑賞の視点を豊かにし、対象や事象の見方や感じ方を深めることである。(中略) また、造形的なよさや美しさを感じ覚的に感じるだけに終わるのでなく、感じ取ったことを基に、作者の心情や表現の意図と工夫、生活や社会の中の働きや美術文化などについて考えることで、見方や感じ方はより深められる。」とある。また、美術文化に対する見方や感じ方を深めるためには、「単に美を直感的に感じ取るだけではなく、形や色彩などの知識や、それらを表現の活動で生かした自らの技能や材料、用具の経験、作者の表現における精神、生き方などと作品との関わりなどの多様な観点から対象や事象を感性と知性の両面を豊かに働かせて捉えることが大切である。」と記されている。

① 「造形的な見方・考え方」

「造形的な見方・考え方」は美術科における各教科等の「見方・考え方」であり、美術科ならではの物事を捉える視点や考え方である。美術編では「造形的な見方・考え方とは、美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現や鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、創造力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと」と示されている。

② 「造形的な視点」

美術編では「造形的な視点とは、造形を豊かに捉える視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素の働きや特徴を捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点」と記されている。また、造形的な視点を豊かにするための知識として〔共通事項〕を整理している。

これらのことから、本研究では、美術文化の見方や感じ方を深めるためには、対象を捉える鑑賞の視点が重要になると考える。感性や知性は固有のもので人それぞれ違いがある。それらを働かせ、自分の見方や感じ方で対象を捉え、自分の中に新しい意味や価値をつくりだすことから、視点の持たせ方の工夫が見方や感じ方の深まりにつながると考える。また、「造形的な見方・考え方」が表現や鑑賞の活動を通しての物事を捉える視点や考え方であることから、鑑賞の「見方や感じ方」は〔共通事項〕をもとにした「造形的な視点」が鑑賞の視点の中核になると考える。よって、〔共通事項〕をもとにした「造形的な視点」を活かし、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師

の心情などを実感的に捉える授業構成を工夫する。

2 表現の活動との関連について

中央教育審議会答申では、「感性や創造力等を働かせて、表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成できるよう、内容の改善を図る。」と示されている。また、米升（2000）は「模写」について、「作品を形成している形や色，構図の秘密をさぐるということもあるが，何より，作者の作品に対する思いや心の動き，また，その人の生き方までもがみえてくるのではないか」と述べている。材料となる新聞紙については，藤原（2000）は「紙の中では容易にしかも大量に集めることができる。その安価性と大量性，柔らかさなどから思い切った活動と呼び起こす材料である。薄いので，子供にとって，ちぎる，丸める，包むなどが容易にできる。」と述べている。

本研究では，造形的な視点で捉えさせるために表現の活動と関連させ，仏像を新聞紙等で再現する活動を授業構成に組み込む。仏像を再現することは模写する意図に近く，生徒が仏像をまねたり，創造したりすることで，仏師の思いや願いを追体験できるのではないかと考える。また，再現仏像は一過性のものであり，短時間で制作・記録・片づけを行う。このことから，材料は抵抗感なく自由に使える新聞紙がよいと考える。

3 「対話」による授業構成について

(1) 「対話」について

中央教育審議会答申（平成 28 年）では「子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める『対話的な学び』」を示している。また，美術編では，「自己との対話を深めることや，〔共通事項〕に示す事項を視点に，（中略）言語活動の充実を図ることで，お互いの見方や感じ方，考えなどが交流され，新しい見方に気付いたり，価値を生み出したりすることができるようになる。」と示されている。

(2) 「授業構成」について

美術編では「生徒の主体的な鑑賞の活動を促すために，一人一人が自分の見方や感じ方を持てるようにする場面や主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか，グループなどで対話する場面をどこに設定するか，（中略）といった観点から授業の構成を工夫することが必要である。」と記されている。田村（2018）は，「振り返り」の3つの機能として「①学習内容を確認する振り返り，②学習内容を現在や過去の学習内容と関連づけたり，一般化したりする振り返り，③学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する振り返り」と位置付けている。

(3) 「対話」と「授業構成」の工夫

本研究で「美術文化との対話」「他者との対話」「自己との対話」を重視し，それらを授業の中で効果的に構成することで，美術文化に対する見方や感じ方を深めることをめざす。「美術文化との対話」では，日本の仏像を教科書や画像を使って鑑賞させる。造形的な視点から仏像を捉えさせるため，ワークシートを工夫し活用する。また，仏師の気持ちや仏像に込められた思いや願いを考えさせながら，仏像の再現活動を行い，実感的に捉えさせる。「他者との対話」では，グループで再現仏像を表現し，それを見合ったり，仏像の存在価値を考えさせたりさせる。ここでは，お互いの見方や感じ方，考えなどが交流さ

れ、新しい見方に気付くことができると思う。そして、「自己との対話」である振り返りにつなげ、新たな気付きと今までの経験や既習知などを相互作用させることで、自分としての価値をつくりだすことができると思う。

VI 授業実践（第2学年）

1 題材名 「刻まれた祈り」

2 題材目標

目 標	知識及び技能	・仏像の形や色などの性質やそれらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解できるようにする。
	思考力、判断力、表現力等	・仏像や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさを感じ取り、美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深めることができるようにする。
	学びに向かう力、人間性等	・主体的に仏像を鑑賞する喜びを味わい、美術文化を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく態度を養う。

3 指導計画（全3回）

	時	主な学習活動	指導上の留意点	評価観点と評価方法
第1次	1	仏像を見る視点を確認し、その種類や特徴を捉える。	仏像の資料を提示し、仏像の種類や特徴の根拠となる部分を明確にさせる。	【思考力、判断力、表現力】 授業観察・ワークシート
第2次	2	仏像の再現活動を行う。	仏像の形や表情の特徴、全体のイメージを捉えさせ、仏師の気持ちを意識させながら、表現させる。	【知識及び技能】 授業観察・ワークシート
	3	再現仏像を鑑賞し、美術文化について考える。	鑑賞の視点をもたせ、仏像の存在価値と美術文化を自分との関わりから考えさせる。	【思考力、判断力、表現力】 授業観察・ワークシート

4 本時の目標

仏像に対する人々の思いを感じ取りながら、美術文化について考え、見方や感じ方を深めることができるようにする。

5 授業仮説

- (1) 再現仏像を鑑賞する場において、他のグループの考えを聞き、再度仏像を見ることで、美術文化を実感的に理解することができるであろう。
- (2) 振り返りの場において、グループで仏像価値を話し合った後、美術文化を自分自身と関連付けて考えさせることで、自分としての価値をつくりだすことができるであろう。

6 本時の展開（3／3）

	学習活動・内容 【対話】	指導上の留意点 ○教師の手立て ●発問 ■生徒の反応	★鑑賞の視点
導 入	1 目標を確認する。	○広隆寺の弥勒菩薩を見せる。	
	2 授業の流れを確認する。	○授業の見通しをもたせ、活動させる。	

今日のめあて
仏像に対する人々の思いを感じ取りながら、美術文化について考えを深めよう。

展開	3 グループで再現仏像について振り返る。 【他者】 4 他の再現仏像を鑑賞し、仏像に込められた思いや願いを考え、共有する。 【再現仏像・他者】 5 4で話し合ったことを全体で発表する。 【他者】 6 自分たちの仏像の存在価値を話し合い、発表する。 【自己・他者】	○前時の振り返りをもとに、仏像について自分の感じたことや考えたことを共有する。 ■「仏像は人々の笑顔を守りたいのではないかと思った。」 ○再現仏像の写真をグループに配布し、全体のイメージから仏師の思いや願いを、根拠をもとに考えさせる。 ■「穏やかなイメージの仏像。口がほほ笑んだ感じなので、人々に愛されている感じがする。」 ○代表者に発表させ、キーワードを板書する。 ■「全体から優しいイメージを受けました。人々を見守るようお願いを込めたと思います。」 ○仏像写真を見ながら、仏師の思いや当時の人々の思いを想像しながら、現在の存在価値を考えさせる。また、ホワイトボードに書かせ、発表させる。 ●「仏像は今を生きる人々にとってどんな存在なのだろう」 ■「昔から大切に受け継いでいるものだから、住む人たちの誇り。」「心のより所」	★仏像の存在価値 ★特徴から全体のイメージ、仏師の思いや願い ★今を生きる人々にとっての仏像の存在価値
まとめ	7 授業を振り返り、美術文化と自分自身との関わりを考える。 【自己】	○美術文化の画像を見せ、考えたこと等をワークシートに記入させる。 ●「私たちににとって仏像のような美術文化は何だろう。また、それらについて、どう関わっていききたいか」 ○全体で2、3人に発表させる。	★自分と美術文化との関わり

Ⅶ 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

仏像を「みる」場において、造形的な視点をもたせるワークシートの活用やグループで仏像の再現活動をさせることで、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師の心情を実感的に捉えることができるであろう。

【結果】

本研究では「美術文化との対話」として、造形的な視点で仏像の特徴等を捉えさせるために、段階的に視点を移動させるワークシートを活用した(図1)。鑑賞する前に造形的な要素を引き出し、パワーポイントで確認した後に、①直感、②仏像の細部の表現・特徴、③全体から受けるイメージについて段階的に考える活動を行った。第1時に、ワークシートを使い阿修羅像の鑑賞を行った。生徒Aの記述から、②細部の表現・特徴は【形】や【色彩】、【素材】、【構成美】などの造形的な要素に着目し、造形的な視点で仏像の特徴を捉えようとしていることがわかる(図2)。また、②の「身に付けているものがきらきら光っている(金?)」を根拠に想像を膨らませ、③の「金を身に付けているので尊いイメージ」と全体のイ

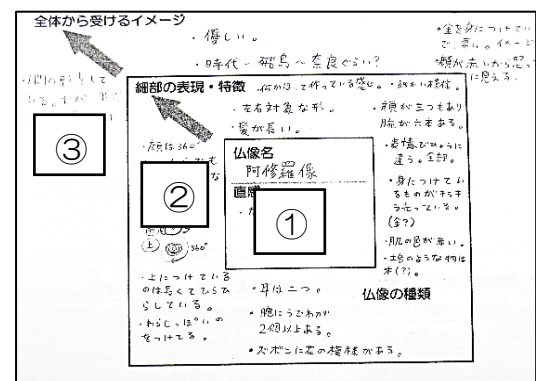


図1 ワークシートの一部

メージを感じ取っていることがわかる。その後、生徒同士で捉えたことを共有させた。阿修羅像の体や腕の細さに着目し、「痩せているから、せつちかかもしれない。」や赤い顔などから「怒っているのかな」と身近にいる人物や自分の経験に重ね合わせて、仏像を感じ取っている様子が見られた。

第2時では、仏師の表現の意図や工夫を感じさせるため、ワークシートで仏像の特徴を捉えた後、グループで仏像の再現活動を行った。活動の際には、仏師や仏像になりきることを意識させた。仲間との対話の様子から、生徒は髪型の特徴や二重円光の存在に気付いたり、再認識したりしていることがわかる。また、仲間と対話しながら「写真を見る(鑑賞)」「制作する(表現)」を繰り返し、より特徴を捉えようとしている様子が見取れた(図3)。



図4 再現仏像写真(左)

表1 再現活動後の振り返りの記述

- ・新聞紙でつくるのが難しいということは、**1つの木材から平面ではなく、立体的に作るのは難しい*1**と思った。特に自分の伝えたい気持ちを伝えるための表情はすごく難しいと思った。
- ・再現仏像をつくるだけでも時間がかかったのに、**あのサイズの仏像を作るのはとても時間がかかる*2**と知った。(奈良の盧舎那仏像の再現活動後)
- ・仏像も顔はどう見ても無で、目を閉じていると思ったら、**目が若干開いているから見物者を見ていたのでは*3**と思った。(仏像になってみて)

仏像	阿修羅像
①直感	・なんかすごい
②細部の表現・特徴	・顔が3つ、腕が6本ある。【形】 ・表情が微妙に全部違う。【表情】 ・肌の色が赤い。【色彩】 ・身に付けているものがきらきら光っている。(金?)【色彩・素材】 ・彫っている感じ【質感・素材】 ・左右対称な形【形・構成美】
③全体のイメージ	・やさしい。 ・時代…飛鳥～奈良ぐらい? ・金を身に付けているので尊いイメージ。



図2 図1の生徒Aの記述内容(抜粋)
【造形的な要素】筆者加筆

- S1:(仏像写真から髪型を見て)髪のをどのように入れるの?
- S2:(頭を指し、髪をなぞるしぐさをしながら)このように入れた方がよくない?
- S3:うんうん。髪の手らしくね。
(新聞紙で作った頭にマスキングテープを貼り始めた。)
- S1:(写真を見て)炎の下の丸いものはどうする?
- S2:丸いのは何?
(写真を確認後、新聞紙を丸めて棒状に二重円光を作っていた。)



図3 再現活動での対話の様子

仏像写真と再現仏像から、仏像の特徴や印象をよく捉え表していることがわかる(図4)。制作した生徒の一人は火焰光(光背)の炎の表現から「激しく燃えている」と感じたことを、壁を利用して新聞紙で立体的に広がりを見せながら表していた。別の生徒は「表情が怒っている」と表情と光背から表現の意図や工夫に気が付き、目を見開き、唇をかみしめている表情を再現していた。その後の「自己との対話」である振り返りでは、「怒りの強さ」ではなく「守ろうとしている強さ」と仏像に込められた思いを感じ取っていた。

表1からは仏像の表現の意図や工夫の他に、仏師の制作時の様子や心情などを想像しながら捉えていることがわかる。仏像の再現

活動で、木材などの材料から仏像を立体的に造り上げる難しさ(表 1*1) や仏像が完成するまでの時間の長さ(表 1*2)を、仏師の気持ちに自らを重ねて推測していることがわかる。また、表 1*3からは仏像になったことで、仏像側からの気持ちを想像し、実感として捉えていることがわかる。

再現活動に関する事後アンケートでは、「再現仏像を作ることで、仏像の特徴や仏師の気持ちをより捉えることができたか」の質問に対して、全体の 74%の生徒が肯定的に回答している。「小さなポイントにも気づく」「どのように工夫すればいいか」などの理由から、制作の工夫や細かな特徴、仏師の気持ちを捉えていたことがわかる。一方、否定的な回答の理由として、仏像の時代背景などの知識に関する学習を求める意見があった(図5)。

【考察】

造形的な視点をもたせるワークシートを活用することで、仏像の見る視点が焦点化され、根拠を基に全体のイメージを捉えることができたと考える。さらに、仏像を再現する表現の活動を授業構成に組み込むことで、仏像の形や表情などの特徴をより細かく捉え、見るだけでは気づかなかった表現の意図や工夫、仏師の気持ちなどを実感的に理解することができたと思われる。

このことから、造形的な視点をもたせるワークシートの活用やグループで仏像の再現活動をさせることは、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師の心情を実感的に理解でき、美術文化に対する見方や感じ方を深めるために有効だったと考える。しかし、材料・技術・方法・様式などの知識の習得に関する手立ては不十分であり、感じたことを表現することに課題がある。よって、鑑賞に必要な知識と造形的な視点を関連付けた手立てを工夫し、美術文化を捉えさせることが必要である。

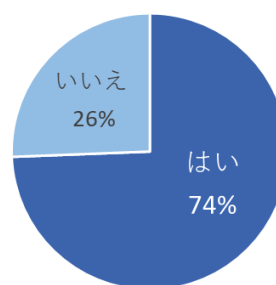
2 作業仮説(2)検証

授業の一連の流れにおいて、仏像の存在価値をグループで話し合わせ、考えを共有させることで、新たな気づきや発見を生み、仏像や身近にある美術文化について自分としての価値をつくりだすことができるであろう。

【結果】

第3時では、仏像の存在価値について、「他者との対話」であるグループでの話し合い、全体での共有、そして、仏像や美術文化についての「自己との対話」である振り返りを行った。まず、現

再現仏像を作ることで、仏像の特徴や仏師の気持ちをより捉えることができましたか



「はい」の理由

- ・小さなポイントにも気づくことができたから。
- ・仏師のようにどのように工夫すればいいかなどを考えながら作ったから
- ・木や石を彫るほど何かを伝えたかったのだと思ったから。
- ・仏像と一体感になった気持ちで捉えることができたから

「いいえ」の理由

- ・仏像の時代背景を詳しく教えてもらったらわかりやすいかもしれない

図5 再現活動に関する質問の結果と理由

T : (ホワイトボードを見て) 守り守られている存在って何？

S1 : 受け継ぐみたいな。

T : 誰が受け継ぐの？

S2 : 仏教に入っている人が。

S1 : 自分たちが。

S3 : そもそも仏像がなかったら伝えられるものがないから、自分たちが守っていかなければならいのか。



図6 グループの話し合いの対話と様子

在における仏像の存在価値を考えさせるため、「仏像は、今を生きる人々にとってどのような存在か」をグループで話し合わせ、ホワイトボードに書かせた。机間指導しながら、書いてあることについて問いかけてみると、「受け継ぐ」「自分たちが守っていかなければならない」など、仏像の継承について考えを出し合いながら、仲間の意見にうなずいたり、共感したりしている様子が見られた（図6）。

次に、仏像についての存在価値を深めるために、ホワイトボードを黒板に貼り、話し合ったことを全体で共有した（図7）。ホワイトボードの記述には、仏像本来の価値を捉えた「願いや思いを祈るもの」「人々に勇気をくれる。」「癒しであり、心の支えである」「仏教の象徴」などがあった。また、文化的な価値である「日本の文化的なものを味わう歴史的遺産」「観光資源」「美術作品」などの記述もあり、複数の視点から仏像の存在価値を共有することができた。

話し合いに関する事後アンケートでは、「話し合いの中で新たな発見に気付いたり、自分の考えが深まったりしたか」の質問に89%の生徒が肯定的に回答している。理由には「違う観点で見ることができた」などがあった（図8）。

その後の「自己との対話」である振り返りでは、自分との関わりで美術文化を考えさせるため「私たちの身近に仏像のような存在のものがあるか」と問いかけ、仏像や美術文化について考えさせた。仏像の存在価値について「わからない」と言っていた生徒は仏像や美術文化について「昔から受け継がれてきたもの、私たちが守らないといけないものと思った。」とグループで話し合ったことをもとに自分の考えを整理していた。

仏像には人々の心を癒し支えになるものであり、その歴史的・文化的価値を知ることのできるものだと思います。そして私たちの身の周りには美術文化に興味を持ち考える深めていくことができればいいと思いました。

図9 生徒Bの新たな気づきからの振り返り

生徒Cは、話し合いで考えた仏像の存在価値を自分自身の経験と関連付けて振り返っていることがわかる。仏像のように受け継いでいくものとして、自らが経験した旗頭を取り上げ、「経験するだけでなく、受け継いだ人の思いを伝えることも自分の役目」との旨を記述していた（P50 図10）。し

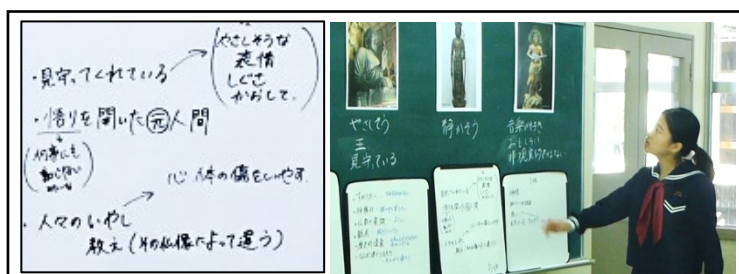


図7 ホワイトボードと全体での共有の様子

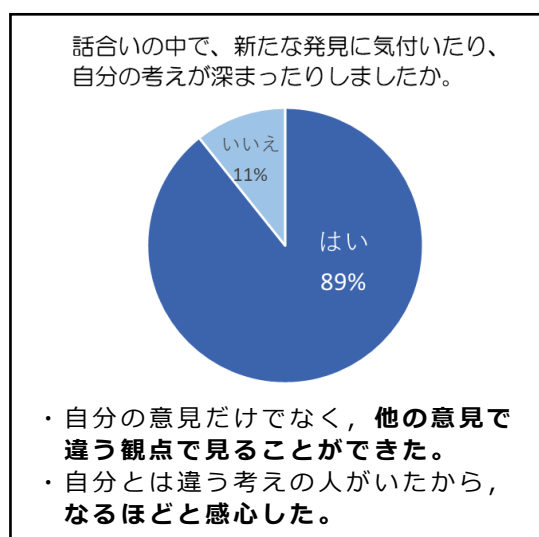


図8 話し合いに関する質問の結果と理由

生徒Bは、他のグループの考えを基に仏像の存在価値を「仏像には人々の心を癒し支えになる」「歴史的・文化的価値を知ることのできるもの」と見出し、身の周りにある美術文化について考えをまとめていることがわかる（図9）。

生徒Cは、話し合いで考えた仏像の存在価値を自分自身の経験と関連付けて振り返っていることがわかる。仏像のように受け継いでいくものとして、自らが経験した旗頭を取り上げ、「経験するだけでなく、受け継いだ人の思いを伝えることも自分の役目」との旨を記述していた（P50 図10）。し

かし、生徒 C は旗頭そのものだけでなく、それを扱う行事自体も美術文化として捉えており、視点のずれが見られた。

【考察】

「他者との対話」であるグループで話し合い活動や全体共有

の場では、仏像の存在価値について仲間と共感しながら考えが広がったり、新たな価値に気付いたりすることができたと考える。そして、他者との交流をもとに「自己との対話」である振り返りを行うことで、新たな気づきから、自分の考えを整理し、美術文化を自らとつなげ、実感的に理解することができたと思われる。

このことから、授業の一連の流れにおいて、仏像の存在価値をグループで話し合わせ、考えを共有させることで、新たな気づきや発見を生み、仏像や身近にある美術文化について自分としての価値をつくりだすことができ、美術文化に対する見方や感じ方を深めるために有効だったと考える。

しかし、美術文化についての定義が曖昧であり、鑑賞の視点のずれが見られた。また、グループによっては、視点のずれから対話の活性や深まりが弱く、学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する振り返りに至っていない。よって、教師が意図する視点を理解させ、主体的に話し合うような「対話」のさらなる工夫が必要である。

私達の周りにも仏像のように大切に扱われていかなければいけないものがたくさんあると感じました。私は旗頭を14から持っていて、去年まで子の数が少なかったけれど、たくさん増えていきました。こうやって、自分の代で終わらせるのではなく、次へ次へと作って、それを扱った人の思いをどんどん伝えていくのも私達の役目だと感じました。

図 10 生徒 C の経験を基にした振り返り

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) 仏像を「みる」場において、造形的な視点をもたせるワークシートの活用やグループで仏像の再現活動をさせることで、仏像の特徴やそのよさ、表現の意図や仏師の心情を実感的に捉えることができた。
- (2) 授業の一連の流れにおいて、仏像の存在価値をグループで話し合わせ、考えを共有させることで、新たな気づきや発見を生み、仏像や身近にある美術文化について自分としての価値をつくりだすことができた。

2 課題

- (1) 鑑賞における美術文化に対する見方や感じ方を深めるために、造形的な視点を豊かにする知識の習得の工夫と表現の活動と関連させた実践を計画的・継続的に行う必要がある。
- (2) 美術文化に対する自分としての価値をつくりだすために、話し合いや振り返りの場において、造形的な視点の持たせ方のさらなる工夫が必要である。

《主な参考文献》

- | | | | |
|------------------------------|--------------------|--------|------|
| 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 美術編』 | 文部科学省 | 日本文教出版 | 2018 |
| 『美術教育概論(新訂版)』 | 大橋功・新関伸也・松岡宏明・藤本陽三 | | |
| | 佐藤賢司・鈴木光男・清田哲男 | 日本文教出版 | 2018 |
| 『深い学び』 | 田村学 | 東洋館出版社 | 2018 |
| 『図画工作・美術科 重要用語 300 の基礎知識』 | 若元澄男 編集 | 明治図書 | 2000 |